

自然保護の原理III-心的および宇宙的観点からの自然保護-

著者	山根 銀五郎
雑誌名	鹿児島大学理学部紀要. 地学・生物学
巻	7
ページ	55-65
別言語のタイトル	The Principle of Conservation of Nature III.-From the mental and from the cosmic standpoint of view.-
URL	http://hdl.handle.net/10232/00006918

自然保護の原理Ⅲ.

—心的および宇宙的観点からの自然保護—

山根銀五郎 *

(1974年9月30日受理)

The Principle of Conservation of Nature Ⅲ.

— From the mental and from the cosmic standpoint of view. —

Gingoro YAMANE **

Abstract

(1) The behavior of human life turns nowadays rapidly from natural way to artificial state. Especially in great cities and suburbs, many people live in apartment houses which are constituted of many small block-space of each residence. It looks like huge numbers of the cages of hen which we can see in the poultry-farming. The life of the hen in the cage is very unnatural and the state of the human life is also very artificial. Both resemble each other. I dare say this state "Poultinization" of human life. The life of cities is, according to my consideration, strongly standardized and stereotyped, consequently people hardly maintain each personal desire and hardly feel the identity of the individual personality. The behavior of human life becomes gradually resemble to the confined life of hens in cages. The life of hens used to be pecking up in the farmers' yards. Like hen, we are apt to lose the affinity with Nature. Unnatural way of life becomes the most usual way of life, and man becomes merely a mechanical machine which follows effectively the social production. But we, the human, instinctly and subconsciously want Nature. In the social organization for the present time and also for the future we cannot avoid this poultinization of human life, especially in the huge cities which hold enormous population. Many evils of human society and its abnormality, which come from immensely from the dissatisfaction of desire, are directly and indirectly caused from the poultinization of human life. To prevent the evils which are caused by Poultinization, it is necessary to conserve the Nature and to keep the Nature primeval. Primeval state is indispensable for the normal healthy human life for the present time and also for the future.

(2) The reason of the necessity of Nature for the mental life is as follows:

- (a) to secure the consciousness of our existence.
- (b) to know objectively exact stature of mankind in the universe.

We can obtain both subjects only by the direct contact with Nature, especially with wilder (primeval) nature. In the artificially denatured circumstances, we can not maintain our confidence of human being. The influence of the nature to mental life may be estimated as follows;

(a) eternity, (b) infinite, (c) inertia, (d) ability to revert and (e) diversity. Modified nature or pseudo-nature exercises these power only in decreased degree or quite not

* 鹿児島大学理学部生物学教室

** Biological Section, Faculty of Science, Kagoshima University, JAPAN

(3) Conservation of nature does not always coincide with protection of nature. Protection of nature means usually to prevent destruction of nature and to keep nature *in situ*, meanwhile conservation of nature means often to obey it to the management of mankind and often compell the nature to exploitation.

(4) It is not right to choice one of two, exploitation of nature or protection (conservation) of nature. Exploitation is often justified by the name of increase of the welfare of the people or maintainance of the material life. But if the mental happiness of the people were lost, it is not good. Man must be happy and healthy both physically and mentally. Consequently the decision to choose the one out of the two must not be carried on generally and abstractly, it must be considered specially and concretely in each case, always appreciating the wellfaire of the inhabitants, nations and mankind, both mentally and physically.

(5) The protection of nature, including the mankind, must be considered and carried on from the cosmic standpoint of view. In the solar system only our planet alone reach to this diversity of nature; ocean, air, plants, animals and mankind. Beyond the state of moon and mars, our planet could have evoluted to this state of nature. We, the human being, as the possessor of the *sofia* (sentiment, rationality and wisdom) ought not to prevent or destruct the evolution of the universe. We protect nature not from the egoism of the mankind, but from the standpoint of the evolution of the universe. From this objective aspect alone, we can protect and keep the nature of the earth as a whole.

第1報⁽¹⁾において自然保護の必要性を人間環境確保の見地から論じ、第2報⁽²⁾において自然保護が人間の心の形成、維持、安定に必要なことを論じた。第3報において心的見地並びに宇宙の見地から論じたい。

人間生活の養鶏化と自然保護

人口の増加とその都市集中の結果は人間生活の養鶏化が始まった。以前の都市のスラム街(貧民窟)とはまた別の非人間的生活が、文化的生活の装いのもとに営まれる。非個性的な限られた空間のアパート生活は自然から隔絶されて、高層の建築となって、都市周辺に蝟集する。人々はそこにねぐらを構えて、直接的、間接的生産に従事する。これはまさに、かつては庭先に餌をついばんでいたニワトリが巨大に配列されたケージの中にとじこめられて、産卵を強制されている尨大な養鶏場をほうふつさせる。ニワトリにはもはや自然はない。しかし生きて、餌を与えられ、夜も電灯に照らされて産卵を強いられる。このような状態を見ると、夜そして闇すら貴重な「自然」であることに気がつく。

人間の生活は社会というオリに入れられた生活であり、それが原因となって人間的、社会的異常現象が日常的に瀕発すると喝破したデスモンド・モリスの議論⁽³⁾は現在の高層集団アパートの生活に最も端的に表現される。

自然からの隔絶こそその姿である。自然保護の論議は発生的にみると失われ行く自然への愛惜に始ったと考えるが、それは自然破壊の急速な進行と生活環境の異常な汚染から、いつしか人間の生きるための生活環境の確保、つまり環境保全に変わってきた。protection of nature から conservation of human environment となった。それが合さって conservation of nature 自然の管理という複合的な概念が成立することになる。

人間環境の保全は通常、人間生活のための資源の枯渇を恐れての資源の維持確保と生活環境の汚染を恐れその喪失を防止する生活環境の維持確保の両面から説かれている。ともに人間生

活の物的な面への配慮である。

しかし人間の生活は物的のものが用意されただけでは満足されない。心的のものが用意され、それが健全に営まれなければ人間らしさは発揮されない。そのためには心を遊ばせるところの自然が必要である。自然は人の心の多くのものを形成し、人の心の実質となっている⁽⁹⁾人間の生活が否応なしに自然から離れて、養鶏化、されて行く現在にあっては、私たちが自然に直接触れて、それを私たちの中に取りこむことが大切である。これなくしては人間らしい豊かな、そしてゆとりのある生活は成り立たない。しかもそれには人工化し、公園化した擬似自然 pseudo-nature では用をなさない。以前開発や都市化がこれほどまで進まず、身近に自然が多分にあったときには、人工的に変化された自然が喜ばれもし、それによって人々は自然をせん細な面において味い、造化の微妙さを楽んで、生活に潤いを与えた。しかし今は違う。自然らしい自然は身近から失せて、喰い荒された残骸があるばかりである。一もとの花では到底人間の心的自立性をとりもどせない。それはいわゆる心の慰めにすぎず、生活の装飾とはなり得ても生きる原動力とはなり得ない。都会の人ほど海にあこがれ、山を愛するという事実は、都会化し、自然から遠去かった人間が自然を渴望する姿であって、脱自然化を余儀なくされた人間が人間本来の要素である自然求めている姿に外ならない。

原始自然の貴重さ

ここにおいて原始自然の貴重さが登場する。原始自然と人工化した自然あるいは偽造自然の違いは、調和ある生態系の有無によって論じられてきた。そして自然度の高いものほど生態系が円滑に運営されて居り、それが人間生活にとって好ましいものであるとの論説である。そして自然を破壊し、汚染することによって生態系が破られ、人間の生存のための自然環境が変質してそれと共に人間生活は健康さを失って行くと。これに異論をほさむことはないが、私は自然、とくに原始性の高い自然の貴重さは、そのような物的関係にとどまらず、現在にあってはそれ以上に心的、情緒的な面にその重要性があると考えている。端的に云えば脱人工化、脱養鶏化にとって、原始自然は大きな力を発揮する。人工化、養鶏化によって、非個性化し、生存本来の自覚を失った人間は、人間喪失とも云える状態であり虫にも劣る在存ともなるが、それが原始性の高い自然に直接、間接に触れることによって、自然のうちに包摂されつつ、同時にまた自然に対立する自己を発見して、自己確立のきっかけをつかむ。それと同時に尊大な人は身の卑少を感じ、自然物としての客観性にもとづく自覚をもち、心なえた人は自彊息まない自然に触れて、生命体としての勇気を取りもどす。無関心の人は原始自然の豊富さに触れて心の躍動をおこす。奥深い原生林、高峻な山岳、清純な溪谷、広漠たる原野、そして茫洋とした大河、限りなき大洋。そして電灯にうすばかされていない涯しない星空、呑暗黒の真の闇すら原始自然としての貴重さを発揮する。

自然と人間の関係は、人間の発展の歴史のうちに変わってきた。太古には原始林は人間の生活をはばむ敵であった。しかし現在はそれを育む慈母である。科学者は自然を、そして人間を物的面において客観的にとらえることを任務と自覚し、心的そして人生的価値に言及することを意識的にも避け、むしろそれを誇りとしてきた。そしてこれは科学の発展の一時期には賢明なことであった。何故なら、それによって科学は、政治や宗教の干渉から身をかかわすことができたからである。しかし科学的探究は本来、それにたずさわるものの好みと云うこと以外に人間生存の知恵として営みつつけてきたことを思うと、人生的なものに、従ってその中心には

心的、生活的なものが当然ある訳であって、それに目をつぶることは正しくない。自然保護、環境保全を論じかつ実践するときは、人生の重要事である心の問題を避けて通ることできない。これを敢えてしなかったが故に、従来の自然保護論は理論的根拠を確立できず、開発論者の理不尽な議論に屈服せざるを得なかったものと思う。

“自然保護か開発か”の議論の理不尽さ

自然保護論に対して開発を主張する人々の発する議論は、“自然を開発せずして人間生活、社会生活はあり得ない。まして現在の巨大な人口の生活を確保するには、大規模の自然破壊もまた環境の汚染も止む得ない。なにはともあれ人間は暮して行かなければならぬのだから、と云うことである。

私にはこれは理不尽なオドシとしか受けとれない。自然を利用し、自然を改変し、そのために自然が破壊され、環境が汚染されることは事実であるが、であるからと云って、原形なきまでに山をきりくずし、海を埋め立て、河川をコンクリート溝化し、しかも陸はごみすて場、河川はどぶ、海は汚水の池としてしまってよいと云う結論にはならない。二者択一を迫って、しかもそれを生活の成否という極限的な状態に抽象的におしつづめて議論することは公正ではない。巨大な開発がそれをする人々のエゴなのか否かは別の検討にゆずるとして、この議論の根底には自然を奴隷視し、それを使い開発するのは当然のこととし、そのためには自然がどうなってもよい。そして人間は環境の汚染位ではびくともしないとの考えである。もう一方の感じ方、自然に愛着をもち、それなくしては人生の爽りはなく人生は空しいとの考えと対称的である。

資源確保的にみても、環境保全的な見地からも、自然の絶対的保護があり得ないことは当然である。さりとて人生の基盤としての自然無視はこれまた理論的にも実際的にもゆるさるべくもない。つまり自然保護か開発かと云うことを二者択一的に抽象的に論じることは人生的に無意味な議論であることを銘記すべきである。一般論として開発論を優先させて、それが無拘束に正当性を主張してきた所に、今日の自然の荒廃が招来され、極度の環境の汚染がばつこしたのである。

元来自然保護や環境保全は普通の考えでは人間生活を確保するためのものものである——この点については後述するが——。従ってもし開発が多くの人に生活必需の物資を供給するためのものであり、あるいは道路開さくや航空路のように生活の能率化に欠くことのできないものであるならば、両者は理念的には矛盾するものではなく、両々相いまって人間生活確立のために役立つはずである。それなのに現実生活においては極めて峻わしい矛盾と対立の関係にあるのは“自然を壊さずしては自然を利用できず、利用の結果の廃棄物によって環境を汚染せずには自然に働きかけられないと云う”と云う方法上の原理的矛盾の外に、他の事情が介在してくるからである。それは個人的エゴ、企業のエゴ、地域のエゴ、国家的エゴが働いて公正な判断を曇らせるからである。

しからは公正な判断とは何んであろうか。それは抽象的観念的二者択一的主張はさて、保護も開発も人生建設に必要なことを認めた上で、個々一つ一つの開発が地域社会にとり、あるいは国家民族にとり、人類全体にとり、しかもそれは目前の利害だけでなく、遠い将来（少くとも一世紀後）の事情を考えて判断することである。開発によって失われるものが掛け替えのない自然であったり、その廃棄物によって環境の汚染が甚しかったりする場合はその開発は

他の方法で替えなければならない。逆にその自然は破壊されたとしても、それを最少限度に止める配慮のもとに開発されることにより、地域やさらに広範囲の人々が絶大な福祉をうけるならば、その開発はゆるさるべきである。この個々それぞれの公平無私の判断を行うことが難かしいがまさに、いい加減な処理をしてきた。その結果が日本の自然の惨状である。猛獣なりネズミなりに喰い荒らされた死骸を見るの思いである。

自然保護と環境保全は同一か

自然保護と環境保全は現在、同意異語のように使われている。しかしこれは関係は深いが必ずしも同じ内容ではない。自然保護とは人間の生活とは直接に関係しなくても、自然を破壊から守り自然のままの状態を持ちつづけることである。現在 conservation of nature を自然保護と訳しているが、conservation には保持、保護の外に管理と云う面が強く感じられる。北米大陸を上空からみると大面積が荒涼たる砂漠になっているが、そこにダムをつくり、道路を通して広範囲の造林をし、耕地を造っているのがみられる。これこそまさに管理の意味での conservation of nature と云うにふさわしい。自然に働きかけて不毛の土地を人生に役立っている。これは保護と云うより管理であり、近ごろ一部の人が使う「自然の創出」という言葉もある意味で肯ける。私たちの自然保護は10の開発を8に値切ることが大部分の仕事である。これはむしろ preservation とか reservation と云うのがふさわしい。そして壊したところに植樹したりして「自然の創出」と云っている。自然を壊しておいてその何百分、何千分の一かの人工的擬似自然をつくる。これでは到底自然保護でもないし、自然の創出でもない。全くのごまかしである。

環境保全 conservation of human-environment は全く人間中心的な考え方であって、人間が生きて行くため、健康な生活をするための生活環境を保持することである。そのためには自然を破壊から守って保護することが必要となると云う意味で、両者が結ばれる訳である。人間の立場で考えると自然保護は環境保全のために必要となる。ここで云う環境とは単に実生活のための物的な自然環境ばかりではなく、感覚を満足さす **感覚環境 sensual environment** や情緒を健全にたもつ **情緒環境 sentimental environment** も包括される。つまり生きるための十分に広い空間や豊から動植物相それに風景なども当然入ってくる。直接原始的な自然に接触できぬ場合にも間接な体験による **概念環境 conceptual environment** も **自然環境 natural environment** の延長線上に姿を現わす。

自然保護が人間の立場から取上げられるときは上述のように環境保全のためにされる訳であるが、この際、汚染の問題とも関連して、自然環境が保全されれば自然は破壊乃至変形してよいのかと言う問題が登場してくる。たとえば山崩れや洪水を防ぎ一方水を確保できれば、人跡稀な山奥の原生林は伐っててもよいのではないか。そして都会周辺に大造林するならば、資源利用、人間環境の確保の点から一挙両得ではないかとの考えが出てくる。これは次の諸点で誤りであること立証できる。

(1) 原生林の価値は山崩れや出水防止だけにあるのではなく、その原始性によって人間の心に大きな影響力をもっている。

(2) たとえ **直接接触** できなくても **間接体験** によって概念環境として、人間の実存感に大きく働く。

(3) 伐採、造堰工事のため原生林地域は徹底的に破壊され、単に樹木の喪失だけでなく、地

域全体の破壊がもたらされて、たとえ人工造林や堰造工事を行っても、失われた原始自然は取り戻せない。

(4) 人工造林は天然林と全く趣を異にする。人工的擬似自然は真性の原始性を役を果し得ない。いくら年月をかけても山奥の原始性は再現されない。

(5) 人間環境は単調平板なものになる。従って人間生活は野性的活力を失い、創造力の減退が招来される。

宇宙的立場からの自然保護 ——自然保護は人間の立場だけから重要なのか——

これまでは自然保護にしる環境保全にしる、専ら人間の立場からの重要性が論じられた。ところで人間は自分の生存のためだけに自然を大切にし、それを破壊汚染から守ればよいのであろうか。自分の生存が確保さえされれば自然はどのように喰い荒されてもよいものであろうか。たとえ人間が即刻この地球から消え去ろうと、この地球の豊かな自然は破壊せずにおくほうがよい。と云うのは、とくに生物現象については、地球の近くにある天体には見当らない現象である。地球は、月や火星が現在の状態で発達を止めてしまったのに反して、月の状態からさらに進化して地球的状态になり⁽⁴⁾、堆積岩、土壌、大気が形成され、その過程のうちに生物は発生した。その後の約40億年の進化うちに豊富な生物相が現出した。地球にこのような生物の発生進化が行われたのは地殻の侵蝕と堆積によることであり、そのためには地球の大きさ、太陽からの距離などが作用し合った結果である。木星にも生物生存の可能性は薄いとなれば、太陽系中にあってはいまわれわれの見る地球上の諸現象は稀有に近いものといえる。生物現象を始めとしてかかる特異な天文学的發展の結果できた生きものを含んだ地球上の自然である。これを人間の手によって破壊消滅させるにはしのびない。

これは誰のためと云うのではなく、自然にあるものは自然のままに残すというごく素朴な考え方である。

この素朴な考え方は現在の人類の生存確保と云うことと矛盾せず、従って危険性もない考え方である。自然に存在するもの、自然進化の過程のうちに生じた現在の地球の自然は、自然現象として稀有とは云えないとしても⁽⁵⁾ 少なくとも月には見られないより発展した自然の姿である⁽⁶⁾。人間は理性的存在であって、主観的認識に外にものごとの客観的把握を特性としているのである。従って自己の存在の有無に拘わらず、宇宙進化の産物としての地球の豊かな自然を保つよう行為することは人間の誇りとしてもごく自然なことである。これは自己の存在が終焉を告げたあとは、地球はどのように破壊されようと汚染されようとかまわないとする態度に対比させたとき、人間としてより高級な態度のように私には思われる。数百万年という長い旅の後にも、旅の恥はかき捨てないという態度である。そしてこのような克己的な態度のもとにのみ現時点での自然尊重、自然保護ということが実りのある実行となり得るのだと思う。

宇宙的永遠性と地上の自然保護

天体として特異な豊かさをもつ地球の自然も、それに発生した人間の行為によって、今や一つの危機に直面している。人間の尺度では一世紀はかなり長く感じるが、宇宙的尺度ではまことに短い一瞬である。現在の破壊汚染の速度ではその瞬間の来るのは間近いようである。今にして自然の自律性をとりもどすように自然保護に全力を傾けるべきである。次の諸点を重要な

ものと考える。

- (1) 天然林を伐らぬこと。とくに日本においては、林業は天然林の伐採林業から人工林の能率的育成に転換する。鳥獣の棲家もこれより確保。
- (2) 海岸の埋立を行わないこと。埋立てによって海浜生物を衰滅させ、海岸の美景をなくして、コンクリート壁で国土をかこむことになる。
- (3) 河川を排水溝化しないこと。河川は大なり小なりコンクリートで固めたドブ化して、淡水に棲む生物の棲家を奪っている。
- (4) 河口湿潤地を埋立ぬこと。鳥類の生息地を確保する。
- (5) 山岳地帯に道路を開さくしないこと。樹木、草木、鳥獣、昆虫などの保護と、山岳の原始性の確保のため。
- (6) 以上の外いわゆる公害発生、環境汚染をおこす事情については詳論をさけるが、一つだけ重要なことを記したい。それは鉱業工業だけが公害、汚染の原因ではなく、農業も家畜の尿、農薬などの点、また保健衛生的処置が消毒薬の多量使用によって害毒を流すことも留意すべきことである。航空機による排気ガス、自動車による排気ガスは勿論だが、石油タンカーの海洋にすてる重油カスが年間1000万トンに達するとは言語同断と云うべきである。とくに見落とし勝ちなのは日常生活からくる汚染である家庭の洗剤使用一つ考えても、その量の莫大さからくる汚染は想像を上廻るものがある。上水道の水が最近急にまづくなったこともこれに無関係ではない。さらに河川や海岸にすてる生活排棄物が自然をよごし、とくに美観を害すること甚だしい。自然保護、環境保全は企業、行政の責任だけでなく、住民一人一人の自覚にまたなければならぬことが肝に銘じて感じられる。地球や自然の宇宙的永遠性が私たち一人一人の行為に関っているのであるから、私たちの存在自体の重大性が痛感される

結語——人間生活の安定化のための自然の重要さ

人間生活の安定化はまず衣食住の充足にあることは明らかである。そしてそれが一時的のものでなく恒久的に行われるとき、私たちの生活は明日のことも分からない鳥獣の生活とは根本に違ったものになる。現在——それは刻々うつり変って行く速度の速い現在であるが——文明化した社会の人々の生活を原始時代や鳥獣の生活に比べたとき、明日に対する安定性は高いのは確かであろう。衣食住と云う生活の物的な面が今日のように安定化するについては、長年月にわたる人間の努力がそれを可能ならしめた訳である。自然についての多面的かつ正確な認識それにもとづく自然への働きかけが数十万年前の採集生活をしてきた原始の時代から狩猟時代、農業時代、工業時代、エレクトロニクス時代を通じてなされてきた。太陽のエネルギーだけに頼っていた時代には夜になれば暗く寒かったのに、火の使用を覚えることにより、時間の束縛なく、また散漫な太陽のエネルギーとは違って、集中的に使うことができるし、またそれを任意に移動させることもできる。火の発見はエネルギーの面から人間の活動を時間的にまた空間的にそして仕事、行動の質の面において人間の行動を自由にし、自然の束縛から解放した訳である。新石器時代の農業の創始が物質面からの人間の活動を強力にし、安定化したのと並んで二つ大きな進歩である。火そしてエネルギー源は木材、獣油、石炭、石油、原子力と変遷し、その変形として電力が登場する。衣食住のもととして岩石、森林木材、耕地、野獣、海獣、家畜が利用される。太古のことは別にしても有史後の人間活動によって、地表の状態は大きく変えられ、かつての森林地帯はそれを利用して砂漠となり、その資源に依存してい

た民族は滅亡を余儀なくされた例が、北アフリカ、西アジアにいく多みられる。

現時点にあっては原始自然の絶滅が憂えられるほどに、地表、地中、海中、空中が人力によって乱されてしまった。人類の存続と関係がないとは考えられない。

さて、人間の生活は豊かになったであろうか。未開発の地域の人がいまだに生活の安定を欠き、特に物資の欠乏のため飢餓線上にあることも報じられている。しかしこれはその多くが過去、近くあるいは遠くの、人間社会の運営の仕方の誤りが現われているのであって、自然関係だけでそうなっているのではない。過去の社会制度とくに植民政策の悪影響が今日の悲惨さを招いているようである。今日先進国と云われている地域の人々は、程度の差はあっても、いずれも他地方の人々の犠牲において富を蓄積し、その余力をかって自然開発を強力にすすめて行った。その結果は今日眼前にみるような生活物質の豊かさによるいわゆる「よい生活」ができるようになるが、同時に自然は枯渇し汚濁にまみれるに至った。自国の荒廃は勿論、いわゆる未開発国の自然もおかされるに至っている。

ここにおいて本論文の最初の人間生活の「養鶏化」の問題に立戻ることになる。生活物資が豊富になったと云っても、多数の人の労働によって得られたものであり、それを多数の人の生活に振り向けるのであるから、当然それはあり余ったものではない。住居は鶏舎化し、食料、衣料は供給に便利のため、人工化、格一化してしまった。いずれにせよそれは脱自然であり、人工化であり、文化の自然からの逸脱の面の著しいものである、しかもその製品は利潤を上げるために絶えず、規格変えがあり、昨年の品は今年はなく、部分品のないため修理はきかず排棄する始末である。いわゆる生活環境も工業地帯をつくり、住居をつくり、娯楽施設をつくりそれを能率化するために、絶えず拡張し、変革する。人間の生活環境は物的に極めて安定を欠く一方情報関係は知的面からも情的面についてもあふれるばかりの情報を流し、それをうける個人個人はその過多に悩まされる一方、中毒症状を呈して更に強烈なものを求める。この面から心の安定さは著しくゆすぶられる。物心両面において豊富ではあるとしても安定をかく状況と云わなければならない。

ものの発達の矛盾の姿と云おうか、当初人間生活を豊饒たらしめた自然開発が、今日は人間生活の荒廃をもたらしている訳である。人間は心身の安定なくしては生活できない。とくに原始の野獣と違って複雑な社会生活のものとある今日人は物的な保証と同時に心の安定が不可欠である。これなくしては集団生活の社会の安全は期し難い。

安定と云っても、それは格一的な単純性と云うか、個性を没却したものは心的にも物的にも生き生きとした人間生活をもたらさない。養鶏化しつつある人間生活を救済して、生きがいのあるそしてそれ故に力のある人間を保つには、人間生活の頽廃をもたらした脱自然性をこれ以上進めずに自然性をとりもどすことである。それには社会政策と相いまってまず人間生存の母体である自然をこれ以上破壊せず、汚染せずに、その自然のもつ活力によって人間性の再建を計るべきである。

自然が人間の安定に働きうる理由として。

(1) **自然の永遠性** 自然はそれに極端な人為を加えない限り大きくは変化しない。少くとも感覚的にはその変化は感じられない。自彊不息ざる自然であるから決して静止はしていず、絶えず瞬間的变化はしていながらも、それは全体として自然の不動性をゆるがすことなく、永遠の存在として人間の感覚、情緒に働きかける。

(2) 状態の復帰性 自然は部分的には絶えまなく運動し変化する。草の生長、蕾の開花。動物の飛翔、そして川の流れ、大洋の怒濤、また雷鳴、電光、大雨、暴風など、日の出にはじまり夕風に終る一日の変化。変化をたえずしながらそれが不動に見え、永遠性を謳われるのは何故か。それはたとえ変化はあろうともやがて元の状態が戻るからである。従って自然の本体は変わらないと人間が感じるのである。客観的に云っても変化は表面的であることが多い。復帰性ともまた循環性とも云える。変化はしても繰り返えし同じようなことが、同一の場所でまたは場所をちがえて起きる。とあれば本質的には自然は変わらないと感ずることになる。

(3) 無限性 自然に安定性を感じの一つの大きな理由は、自然が人間に比べて限りなく大きいことである。山岳、密林、草原、大河、大洋いずれも人間の個人のスケールをはるかに超えている。従って人間が多少なにをしても自然はびくともしないという信頼感が湧くと同時に、その雄大さからの神秘感が湧く。人間以上の絶大な存在であるとの圧倒された感じである。山はあくまで高く、海はあくまで深く、河底なども測り知り得ない地の底まで水が流れているかの感じであった。自然への畏敬と云うことになる。今日は科学的知識によって、自然の無限性への信仰は知的には破れてしまった。自然の多くのものが数量的にとらえられれば、理窟の上では無限と云うことにはならない。しかしこれはあくまで観念上のことであることを指摘したい。観念的には有限であっても、実際に自然に接したとき自然の無限性を体験する。大海を泳いだとき、小舟で悪天来中を漕ぎ渡るとき、大森林に踏みこんだとき、そして涯しなく拡がる雪原に身をおいたとき、自然の無限性は心身にしみ渡る。つまり感覚的にまた情緒的に自然の無限性というか自然からうける無限性は生き生きとしている。しかもそれは前に述べたように原始性の自然にその度が高い。

従って自然は現在においても永遠性、復帰性、無限性によって、人間の存在を心の面において支持し、日常生活からくる人間の頹廢を救う力をもっている。多様性については前述した⁽²⁾

この自然を目先の貧欲のために荒廃させてしまったら、人間はよって立つものを物的面を失うばかりでなく、心の面も失ってしまう。そのときこそ人間の「養鶏化」が全き形で現出し、人間はたとえ生きながらえたとしても鶏舎の中のニワトリと何んら選ぶことのない存在に墮してしまう。少数の利潤追求者とそれに追従するもののために自然を破壊汚染されたのでは人間の安定した生存は崩れてしまう。自然を今以上には破壊汚染せずに、弱ったとは云えまだ持ち続けている自然の活力を維持するように自然保護を行うことが大切である。そして地球上でいま行う自然保護は宇宙的な立場から見れば、宇宙がここまで達成した進化を破壊せずに、宇宙の永遠の発展を妨げないということになる。

要 約

(1) 人口増加、都市への人口集中、いわゆる都市化によって、人間の生活は「養鶏化」することは必然である。

(2) これを阻止することが不可能であればある程、養鶏化による弊害をさけるべく自然を保護することが重要である。

(3) 何故なら自然は物的な面で人間生活を支えているだけでなく、心的な面でも人間生活を支えている。自然の下にあってのみ人間は人間存在の実感を体得することができて、個性のある、それ故にこそ生き甲斐ある人生をもつことができるからである。牢獄の生活とまで云わな

くとも緑にかけた雪中荒涼たる生活、緑のうせた街の生活をみるだけでも自然の重要性が感じられる。(6)

(4) 現時点では人生を精神的に鼓舞する力は自然の原始性の高い程強い。原始自然はこの点からも保ち続けなければならない。

(5) 人間は物体として生きていけばよいと云うのではない。心の豊かさ、うるおいは人間性の基本的なものである。原始性とならんで多様な自然——動植物の数、種類の豊富さ、山岳、海洋、原野などのさまざまな風景——が必要である。

(6) 人工的な自然は上記のような人間性を確保する力が弱い。それは偽せものの自然、自然のにせものであるからである。都市の公園乃至は手入れをした人工林などはこれである。無価値ではないが、偽似自然であって本来の自然とは質的、量的に価値が違ふ。

(7) 自然保護か開発かと二者択一の決定を迫り、多人数の生きるために開発せざるを得ぬではないかと観念的に断定し、その論法を唯一最大の武器として、自然を破壊、汚染することは全く正しからざる行為である。開発が本来多くの人のためのものならば、開発によって自然が壊されてこれにより多くの人が苦しむのは矛盾である。*自然保護か開発かと、抽象的観念的に決めるのはよくない。両者の共通基盤である人々の仕合せ、(生活の保証と安定とうるおい)の立場から個々それぞれの場面について細心に検討すべきである。

(8) 自然保護と環境保全は同一ではない。いわゆる人間環境を確保すべく自然保護をするという立場、しかもその人間環境とは主に物的な面であることが多いが、これは客観的な自然保護とは同一ではない。この両者を同一視することはすぐ次の考え方を誘発する。「人間環境さえ保全できれば自然を破壊してもよい」と。これは危険な考え方である。たとえ物的人間環境は保全されても、自然が人間の心に働きかける力のあることを思い出せば、人類のそして少くとも日本の現段階にあっては自然破壊は人生建設の敵である。

(9) 自然環境は物質的環境の外に、感覚環境、情緒環境、概念環境を人間に用意する。この点自然と偽似自然とは別種のものである。

(10) 自然保護は人間生活の確保だけの立場からでなく、宇宙的立場においても考えなければならない。地球は天体中独特(あるいはそれに近い)に進化してきた天体であって、地球の状態は、侵蝕、堆積、生物発生、など他の天体にならぬ事情下で生み出されてきた。月はあれ以上進化できず月の段階をこえて進化したのが地球である。この自然の宇宙的意義が感じられる。人間の存在の如何を問わずこの状態を持ちつづけることは、叡知ある被造物としての人間としてやるべきことである。そしてこのような宇宙的自然の中の地球、その宇宙の中の人間という考えに到達したとき、人間の存在、働きが宇宙的影響力をもつ自覚に達し、実存感を自覚するとともにかかる意義のもとではじめて地上の自然保護が確実な実を結ぶことになる。

(11) 自然の永遠性、復帰性(不動性)無限性は、自然に直接触れることによって体得され、全き人間性確立の上に重要な働きをする。測定手段の向上によって自然についての認識は数量化され、その結果、自然の永遠性や無限性に対する信頼は観念的には否定されたとしても、人間性の安定化に対するその面からの自然の働きは、我々の直接の感覚やそれに由来する情緒により発揮される。

注

- (1) 山根銀五郎：自然保護の原理（1972）鹿児島大学理学部生物学教室
- (2) 山根銀五郎：自然保護の原理Ⅱ（1973）鹿児島大学理学部紀要（地学，生物学） 5～6号
P.61～75
- (3) デスモンド・モリス：人間動物園（1969—1970）
- (4) 湊正雄：始源生物の発生（1949年日本植物学会39回大会における「生命の起源、についてのシンポジウム」；生物科学ニュースNo.38, 17—18）
- (5) 地球と同じ状態の天体が，銀河系中にまた銀河系外にかなりあり得ると云うことは現代天文学の教えるところである。しかし，少くとも太陽系内にはありそうにない。
- (6) 旧満州（現中国東北地区）の冬の雪にとじこめられた生活の中では，コップにさしたタマネギの緑の芽をみて現地の人は冬の荒涼を耐えしのいでいたと云う（柴田万年氏談）。